

# イズミノオト



毛利 伯郎 チェロ  
10才よりチェロを始める。上原与四郎氏、桐朋学園で青木十良氏、ジュリアード音楽院でハービー・シャピロ氏に師事。室内楽をロバート・マン、サミュエル・ローズ、フィリップ・タム・ガリアン諸氏に師事。ジュリアード音楽院在学中よりニューヨークを中心として演奏活動を開始。ニューヨーク、フィラデルフィア、インディアナの各地で後進の指導にも意欲的に当たる。1985年に帰国。2015年まで就労交響楽団ソロチェリストに就任。また、東京交響楽団ソロチェリストとして出演、好評を博す。桐朋学園大学特命教授。東京音楽大学各員教授。



長石 篤志 ヴィオラ  
大分県出身。4歳よりヴァイオリンを始め、フィレンツェへの留学を機にヴィオラへ転向。フィエーゾ音楽院にてアントネッロ・ファルツィに師事する。帰国後は東京に拠点を移し、全国各地のオーケストラの客演首席を務める。高嶋ちさ子「ゆかいな音楽会」メンバーとして、また硬派弦楽アンサンブル「石田組」組員として全国各地で演奏を行っている。日本クラシック音楽コンクール第2ヴァイオリン首席奏者。



## シューベルト 白鳥ノ歌

仙台銀行ホール イズミティ21 コンサートシリーズ  
イズミノオト 第11回



吉岡 知広 チェロ・コーディネーター  
仙台市泉区出身。桐朋女子高校音楽科(共学)を経て桐朋学園大学音楽部門を卒業。その後、ライブツイヒ音楽演劇大学大学院に在学するとともに、ライブツイヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団と学生契約をし、在籍。卒業後は同管弦楽団アカデミーに在籍。第9回ピバホールチェロコンクール第4位入賞。チェロを金木博幸、青木十良、藤原真理、毛利伯郎、C・キガーの各氏に、室内楽を今井信子氏、東京クワルテットに師事。現在、仙台フィルハーモニー管弦楽団首席チェロ奏者として在籍。



橘和 美優 ヴァイオリン  
2023年ロン・ティボー国際音楽コンクール第5位受賞。東京藝術大学を首席卒業後、東京音楽大学大学院に特別特待奨学生として在籍中。第2回モーツァルト国際音楽コンクール第2位、第19回東京音楽コンクール第5位、第9回宗次エンジェルヴァイオリンコンクール第1位など受賞歴多数。使用楽器は宗次コレクションより貸与されたA.Stradivari"ex.Rainville"1697年製。

### 「プログラム」

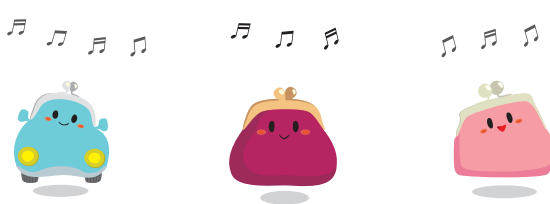
- フランツ・ペーター・シューベルト  
弦楽四重奏曲 第14番 二短調 D 8 1 0 「死と乙女」
- 弦楽五重奏曲 ハ長調 D 9 5 6

Facebook情報

仙台銀行ホール イズミティ 21 コンサートシリーズ  
Facebook公式ファンクラブ イズミノオトモダチ

コンサートに関する情報など発信していきます。ぜひ"いいね!"してください。  
URL: <https://www.facebook.com/izuminootomodachi/>

仙台銀行



公式 SNS で情報発信中! /



各 SNS アカウントはこちら

仙台銀行は、コンサートシリーズ「イズミノオト」への協賛を通して、地域の文化活動を支援しています。

仙台銀行ホール イズミティ21 コンサートシリーズ  
イズミノオト 第11回 シューベルト 白鳥ノ歌

ヴァイオリン  
橘和美優

ヴァイオリン  
川又明日香

チェロ  
毛利伯郎

ヴィオラ  
長石篤志

チェロ・コーディネーター  
吉岡知広

2025  
3 / 2 (日)

【開演】午後3時(開場 午後2時30分)

【会場】仙台銀行ホール イズミティ21 小ホール  
(仙台市地下鉄南北線泉中央駅北3出口よりすぐ)

【入場料】全席指定 3,000円

(市民文化事業団友の会料金 2,700円)

※未就学児はご入場いただけません

2025年1月6日(月)一般発売

## Franz Peter Schubert

【プレイガイド】仙台銀行ホール イズミティ 21、日立システムズホール仙台、藤崎、ローソンチケット(Lコード:25503)  
仙台市市民文化事業団ウェブサイト (<https://ssbj.jp>)

【チケットに関するお問い合わせ】仙台市市民文化事業団 総務課 TEL:022-727-1875(平日9:30 ~ 17:00)

【公演に関するお問い合わせ】仙台銀行ホール イズミティ 21 TEL:022-375-3101(9:30 ~ 19:30 休館日を除く)

【主催】公益財団法人仙台市市民文化事業団、kbb東北放送 【企画制作】仙台銀行ホール イズミティ 21、HAL PLANNING

【後援】公益財団法人仙台フィルハーモニー管弦楽団 【協賛】仙台銀行、宝来産業

# シューベルトをめぐる一考察

執筆：野平多美(作曲家音楽評論家)

ロマン派室内楽の最高峰の音楽を聴く、今回のイズミノオト。とりわけ、歌曲集が有名なフランツ・シューベルト(1797-1828)の室内楽曲をじっくりと聴ける、とても素晴らしい演奏会になることでしょう。

## 〈シューベルトは未来を予感させた作曲家〉

シューベルトは古典派かロマン派かという問いには、古典派の時代に生まれていながらロマン的な音楽を先取りできた稀有な作曲家と言えましょう。

実はシューベルトの生没年は、すっぱりとベートーヴェン(1770-1827)の半生に重なっています。ベートーヴェンがロマン派の扉を開けたことは、晩年の作品の非常に開かれた形式や思いがけない転調を含む奇抜な発想のバッセージが現れることでもよくわかります。

一方でシューベルトはシューマンやブラームスらと同じロマン派と一括りにされますが、前述のように古典派の巨匠の黄金の創作時期と同時代に生きて古典派の流儀を十分に熟知しながら、さらにはベートーヴェンよりも速くの未来を見据えていた作曲家であったと思うのです。シューベルテアードという友人知人に守られてきたという慣習的なシューベルト像の小ちんまりとした作曲家にとまらず、いわば古典派とロマン派を繋ぎ、さらに近代をも予感させた作曲家であったと言つて良いでしょう。

実際の例として、ラヴェルの『ピアノ協奏曲』下調(1937)の第2楽章を聴いていたら、シューベルトのワルツ、あるいはレントラーを思い出しませんか？

シューベルトは、フランスの作曲家たち、とりわけモリス・ラヴェル(1875-1937)に影響を与えました。ラヴェルの優雅で感傷的なワルツ(1911)は、シューベルトの高貴なワルツ12のレントラー(作品77(1827))に着想を受けたと本人が語っています。さらに歌曲集というジャンルでは、ガプリエル・フォーレ(1845-1924)やクロード・ドビュシー(1862-1918)とともに多くをシューベルトから得ているのです。

フォーレとの関係ではもう一つ思い起こされます。1808年に王立寄宿制神学校に入学して、同校のオーケストラや教会音楽の音楽に触れながら学生寮で生活していたシューベルトは、音楽の専門教育はモーツァルトのライバルのようによく映画でも描かれるサリエリを受けていました。王宮礼拝堂での合唱のメンバーに入り宗教曲にも親しんだのですが、ここがフォーレとともに似た教育環境なのです。フォーレは、パリのニードルメーユル宗教音楽学校で10年余も学びました。そう言えば、シューベルトのミサ曲の率直さはフォーレの『クイエム』につながりますし、歌曲集の作曲において、シューベルトはフォーレの灯台となって進むべき道を照らしたことでしよう。

ヴィーの作曲家の系列ももちろんシューベルトに負うところが大きいということを改めて感じています。同じくヴィーで活躍したグスタフ・マーラー(1860-1911)／オーストリア帝国のボヘミア王国、現チェコのカリシュチエ生まれの交響曲でも、旋律線の豊かさや素朴な踊りの引用にシューベルトの影を聞くことができますし、シューベルトが敬愛したベートーヴェンの様々な様式も、マーラーは引き継いでいます。

## 〈ヴィーン人シューベルト〉

さてシューベルトこそが生粋のヴィーン人であるというこ

とは、この作曲家の創作の軸が一度もぶれなかったこと、重要なポイントです。シューベルトのレントラーやワルツは、当時のヴィーンの流行であったでしょうし、丸みを帯びた旋律線は、ヴィーン訛りのドイツ語が反映されているのではないでしょうか。

生まれながらにしてヴィーンの音楽の作法を知り、そのまま自らの作品に投影したのですから、紆余曲折を味わった作曲家とは一線を画すわけです。このように短い生涯の間にとくとき家族との摩擦はありながらもヴィーンに留まって同じ環境で創作活動が進められたことが、シューベルトのシューベルトたる所以なのです。

片やボン生まれのベートーヴェンもザルツブルグ生まれのモーツァルトも、後付けのヴィン風と考えると腑に落ちることもあります。シューベルトが肩肘張らないのは地元だからであり、ベートーヴェンやモーツァルトがヴィーンに上京したのは音楽の都で成功を夢見たから力が入っていたという、ドイツの音楽学博士ハンス・ヨアヒム・ヒンリヒセン(※)の言い分もわかります。(※)『ラッシュシューベルト』編野平多美(アルテス社刊)の著者ちなみに、「シューベルトはヴィン訛りの「ニーヤード」ドイツ語だったと思うから、ゲーテの角ばったドイツ語の詩に曲をつけるのは大変だったに違いないでしょう。」というのは、ヴィン国立歌劇場で永らくコレペティウアー(歌手指導)として活躍したM氏の弁です。

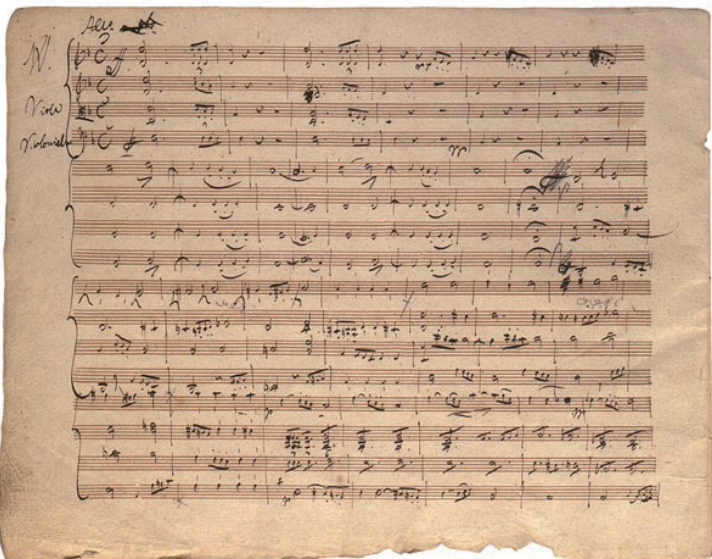
どれもシューベルトの作品をより深く眺められる逸話ではありませんか。

## 〈シューベルトの作曲法〉

シューベルトの作品構造は、前述の旋律線と同じく角が丸いという印象を持ちますし、形式的にも音響的にもそれは当てはまります。柔軟で自由で気ままな音楽性を貫き、楽器法にとらわれず思いのままに筆を進められた強い意志、即興性のさらなる拡大を試みたこと、そして長大な作品になろうともバランスにこだわらないで書き続けられる信念

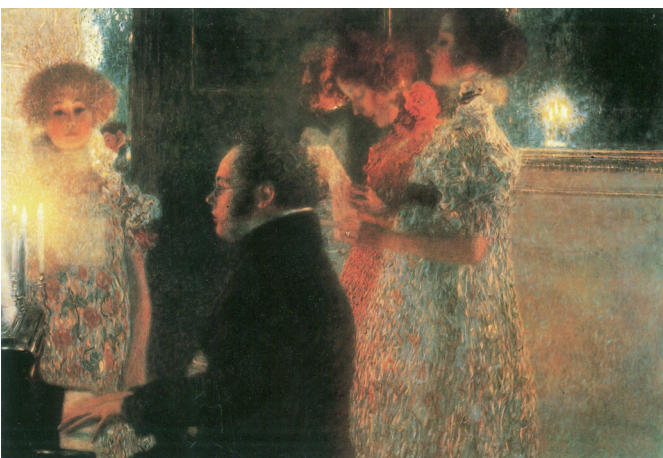


フランツ・シューベルト(1797-1828)

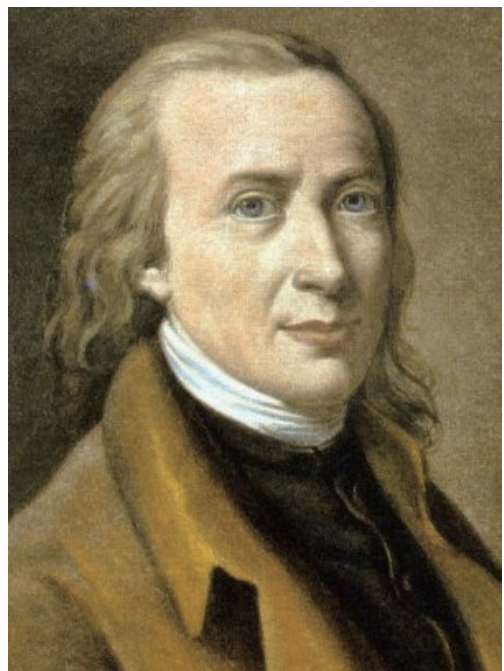


弦楽四重奏曲第14番の自筆譜(ニューヨーク・モルガン・ライブラリー所蔵)

- 1644年 松尾芭蕉生まれる(1694年)
- 1749年 ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ生まれる(1832年)
- 1770年 ベートーヴェン生まれる(1827年)
- 1774年 マティアス・クラウディウス作 詩集『死と乙女』刊行
- 1797年 フランツ・シューベルト生まれる
- 1810年 ロベルト・シューマン生まれる(1856年)
- 1833年 ヨハネス・ブラームス生まれる(1897年)
- 1821年 「弦楽四重奏曲(死と乙女)作曲
- 1827年 ベートーヴェン没
- 1827年 連作歌曲集『冬の旅』作曲
- 1828年 「弦楽五重奏曲」作曲
- 1828年 11月シューベルト没
- 1845年 ガプリエル・フォーレ生まれる(1924年)
- 1860年 グスタフ・マーラー生まれる(1911年)
- 1862年 クロード・ドビュシー生まれる(1918年)
- 1875年 モリス・ラヴェル生まれる(1937年)
- 1947年 サルヴァトーレ・シャリノ生まれる



グスタフ・クリムトによって描かれたシューベルト「ピアノを弾くシューベルト」(1899年)



ドイツの詩人 マティアス・クラウディウス(1740-1815)

もシューベルトの上記の性質のなせる技であると推察されます。

## 〈シューベルトはどんな人だったのか?〉

「チコちゃんに叱られる!」NHK総合2024年12月6日放送)で「当地仙台の宮城学院女子大学の越懸澤麻衣准教授が「小中学校の音楽室に飾られたベートーヴェンの肖像画が怒っているように見えるのは、交響曲『運命』などの激しい曲が有名だからそう見えるだけではないか」という仮説を立て、さらにも「スプリング・ソナタ」が代表曲として知られていればそうは見えないでしょう」という柔軟な回答をしていらしたのを視聴しては、シューベルトの肖像画に見るあの柔和な顔は、実際はどうだったのかと思いを巡らせました。

好青年の印象を与え、小中学校では「未完成」交響曲やピアノ五重奏曲『鱒』などが教材に取り上げられているでしょうから、穏やかな性質ではないかと推測されますが、弦楽四重奏曲の「死と乙女」冒頭のフレーズでは相当な激しさを感じますし、「冬の旅」の幾つかの曲では内に秘めた情熱が表現されています。

そう、シューベルトもいつも友人に囲まれて優しい顔をしていたわけではなく、心の内には葛藤や焦り、寂しさや怒りもあったに違いありません。

それをストレートにぶつけているのは、多くは歌曲と、シューベルトの書く「ノクターン」であると筆者は考えています。

それは「冬の旅」(連作歌曲集1827年作)の主人公が、夜のうちに愛する人の棲む街を出ているからか、「美しき水車小屋の娘」(1823)の粉挽き男が最期の場所を求めて彷徨っているのか、作曲家自身が薄命だったからでしょうか。

まさに、本公演で演奏される「弦楽五重奏曲」(1828)第2楽章の「ノクターン」は、シンプルな書式ながら人生のうつろいを感じさせるとても深い音楽です。この曲がシューベルトの死のたった2ヶ月前に作曲された、いわば「白鳥ノ歌」であることも考えずにはいられません。

深遠なる闇をたとへと歩くのは誰でしょうか? 想像力を高めて是非お聴きください。

## 〈音と言葉〉

「音と言葉」というと、岩波新書のフルツェングラーの同名の著書思い出す方も多いでしょう。

折しも昨年11月にイタリアの巨匠作曲家サルヴァトーレ・シャリノ(1947年生)が10日ほど来日していました。そこで出会ったシャリノの言葉が大変興味深いものでした。何しろその頃シューベルトが言葉と音楽のつなぎ手であったことを始終考えていた筆者は、次の言葉に深く共感を得ました。

10年ほど前に、松尾芭蕉(1644-1694)の句集をよく読んだシャリノは、ランゲージ(言葉)が重要だということを痛感したということです。「言葉はシュプレヒザング(話し声のような歌)である。音楽はまた言葉であり、人の心を揺り動かし、心に訴えかけることができる」と説きました。さらに「音は、香り、味わうことができる」とも言っていました。

まさに、シューベルトの音楽は、歌曲でなくても語っているし、春の、夏の、そして秋の匂いが出てきますし、冬の雪の冷たささえもその音楽から伝わってくるではないですか。

シューベルトこそが、音楽と詩を融合させた第一人者なのです。

## 〈本公演のシューベルトの佳品について〉

「弦楽五重奏曲」の器乐的な書式は、とても斬新なので聴きどころです。第1楽章冒頭から現れる、超高音域の和音には

ハッとさせられ、第3楽章のスケルツォでは狩の音楽のような主題の流刺とした主部と、全く曲想を変えた中間部の、低音部の密集した和音など、ベートーヴェンもピアノ音楽では試みても器楽には書くことはなかった特別な音響を、シューベルトは実施して世に問いました。変わって同曲第4楽章のスケルツォのリズムによるロンドは、当時のヴィーンに近隣諸国から様々な音楽が入ってきたことを示すもので、第1クープレの歌は、  
♫音と言葉の最たるものですからよく耳を澄ませてください。

歌曲「死と乙女」は、ドイツの詩人、マティアス・クラウディウス(1740-1815)の同名の詩集からの一編(1774年作)です。病に臥せて死を恐れる少女に「死は恐れるものではありませんよ、永遠の心の平安です」と丁寧に掻き口説く短い詩で、一対の対話から成り立っています。

乙女: やめて! ああ、これでもう終わり!

野蠻な骸骨(死の擬人化)さん!  
私はまだ若いわ! 私に触らないで。

死(骸骨): 手を差し出してください、美しく繊細な人よ!  
私はあなたの友で懲らしめに来たのではないのです。

元氣を出して! 私は野蠻ではありません。

私の腕の中で穏やかに眠ってください。

この歌曲が「弦楽四重奏曲」(死と乙女)(1821)の第2楽章変奏曲の主題になっています。死への恐怖を描いたような第1楽章や終楽章とのコントラストが素晴らしいので、歌曲「死と乙女」をCDやYouTubeで演奏会までにお聴きください。弦楽四重奏曲版を何倍も楽しむことができます。

どうぞ、イズミノオトならではの逸材のメンバーによるシューベルトの極みをお楽しみください。

# Franz Peter Schubert